

田中宏道教授退任記念論文集の刊行にあたって

経済学部長・経済学会会長 平 田 純 一

田中宏道先生は、2006年3月をもって、ご定年により立命館大学教授の職を退かれます。田中先生は、1941年滋賀県蒲生郡竜王町でお生まれになり、高等学校ご卒業後、日立家電販売株式会社に就職されました。しかし経済学に強い関心を持たれた先生は、同社を退職され、1966年和歌山大学経済学部にご入学、1970年同校をご卒業後は立命館大学大学院経済学研究科に進まれ、1976年に同研究科を単位取得退学されました。同年立命館大学経済学部助教授にご着任され、1991年に教授に昇任され、30年の長きにわたって立命館大学、特に経済学部の教育・研究の発展のためにご尽力頂きました。経済学会では、この間の先生のご功績をたたえと共に、そのお人柄を敬愛し、『立命館経済学』において退任記念論文集を編集・発行することにいたしました。

田中先生は、本学に赴任されて以降、経済学の基礎理論特に独占理論、経済変動論等の担当者として、学部および大学院教育に力を注がれ、数多くのゼミ生、研究者を育ててこられました。また、経済学部の各種役職はもとより、立命館大学二部調査委員長、入試総主査、立命館大学協議員等多数の全学役職を務められ、行政面からも本学の教育・研究の発展に貢献されました。これと併せて、多年にわたり経済学会委員として経済学会運営の円滑化に尽力されました。さらに1996年に設立された経済学部同窓会の幹事を設立以来お務めになり、経済学部同窓会の基盤確立にも大きく貢献されました。

田中先生の研究活動は、正統的なマルクス経済学の方法にもとづく、現代資本主義の基本問題の研究を中心にされていますが、その業績は大きく3つの分野に分けることができます。第1の分野は、恐慌論・産業循環の理論的実証的研究です。第2次世界大戦後から1970年代を対象に、恐慌論の理論展開を前進させるためには、産業循環の局面交替のメカニズムの分析が必要であることを強調され、アメリカにおける長期動向の実証的分析を展開されました。第2の分野は、マルクス経済学における現代資本主義論としての、国家独占資本主義や危機論に関する研究です。ここでは、ヒルファーディングの『金融資本論』やレーニンの『帝国主義論』に対する独自の理解を基礎にわが国の代表的論者の理論を俎上にあげて精力的に検討され、現代資本主義は内部に諸矛盾を生み出すが、他方で再編成によって新たな段階に進むことを示され、旧ソ連・東欧の社会主義体制崩壊後にも、総括的な論稿で、自説の正当性を主張されております。こうした研究の成果は、田中教授と恩師・小檜山教授との共著『現代の経済原論』に生かされております。第3の分野は、各国の電機産業を対象とした独占資本の存在形態と活動に関する研究です。その強い動機となっているのは、独占が常に対立と協調の中にあるとされるものの、競争をはじめ具体的な形態を明らかにしないと独占理論の再生や前進はないとの考え方です。加えて、同教授は近年トマス・モア『ユートピア』における自由と平等を考察されています。この背景には、旧社会主

義諸国における市場経済への移行という現実があります。多くのマルクス経済学者は従来、社会主義の目指すべき目標が国家所有を基礎とした計画経済であるとしてきたが、ここには目標と手段の取り違えがあったことを指摘され、社会主義運動の目標であったはずの自由と平等の関係が再考されねばならないことを説かれている。こうした3つの研究分野は、同教授において統一的に位置づけられており、堅実な研究成果を地道に積み上げられてこられました。

田中先生は、4月以降も非常勤講師・同窓会の会員として引き続き、教育・研究等において本学を支えて頂けるものと考えております。今後とも幅広く後進へのご指導と援助を賜りますようお願い申し上げますと共に、先生の一層のご健勝とご活躍を祈念し、論文集刊行に当たってのご挨拶とさせていただきます。